

「サステナブル滋賀×SDGs」シンポジウム概要

○ 開会挨拶 滋賀県知事 三日月大造

- ・私は、知事就任以降、「私たちはどうすれば豊かに、幸せになれるか」、「私たちの豊かさや幸せは誰かを犠牲にしてないか」、「今の私たちの豊かさと幸せは、将来どうなっているか」の三つを考えている。
- ・そして、「今」「自分」「物」「お金」だけの豊かさではなく、将来も持続的に全ての人が心で実感できる豊かさを、「新しい豊かさ」という基本理念に位置付け、貧困、エネルギー、環境など、多くの課題がある世界と、琵琶湖を中心としたつながりの中で、「新しい豊かさ」を作るための政策を行っている。
- ・滋賀県には、「三方よし」の商人道、「石けん運動」のような環境保全活動のほか、障害者福祉の取組等の経験があり、SDGsの取組に賛同し、都道府県で初めて参画を表明した。
- ・このシンポジウムを、私たちの取組を再評価し、生き方や暮らし方を見直すきっかけにできればと思う。みんなで一緒に考えて、気付いたことを実践し、豊かで幸せな滋賀県を作っていきましょう。

○ 外務省地球規模課題審議官 相星孝一氏 「SDGsの国際的動向と我が国の取組」

- ・2001年にSDGsの前身となるミレニアム開発目標（MDGs）が策定された。内容は、貧困問題、感染症対策、死亡率の改善、教育レベルの向上などで、途上国が対象であった。2015年までの期間で、達成できた目標、達成できなかった目標がある。
- ・一方、2015年までの状況としては、先進国も自然環境、貧富格差などの様々な問題が顕在化し、先進国と途上国が問題意識を共有して同時並行で課題の解決に取り組まなければならなくなった。
- ・そうした背景のもと、SDGsは国連の全加盟国が参加した3年間の交渉を経た2015年9月に全会一致で採択されたもので、MDGsの頃から続いている目標を深掘りしたものや新たな課題がある。
- ・先進国にも関わりのある新たな課題として、人間の営み（経済活動や社会のあり方）に相当踏み込んでいる。具体的には「8 働きがいも経済成長も」は、まさに働き方改革である。「12 つくる責任つかう責任」は、途上国での働き方や労働問題もあり、日本企業の投資も関わっている。
- ・日本は国連での採択前から積極的に議論に参加してきた。SDGsの「誰一人取り残さない」という理念は、日本が1990年代から提唱してきた「人間の安全保障」の理念とも一致するものであり、保健、インフラ、防災等、日本が重視するアジェンダを取り込んでもらうよう、交渉に臨んできた。
- ・そのような経緯でSDGsが採択されたことを受け、2016年5月に内閣総理大臣を本部長とする推進本部を設置し、12月に実施指針として、17のゴールと169のターゲットを今の日本の置かれた状況に合わせた8つの優先課題と具体的施策を示した。
- ・ドイツの財団が作成した報告によると2016年時点での日本の評価は全体で18番目である。女性の社会進出（ジェンダー）や、東日本大震災後の石炭火力の新設等もあった石炭火力（気候変動）は厳しい評価の一方、教育、成長・雇用・イノベーション・インフラでは非常に高い評価である。
- ・今後、①「認知度の向上」、②「進捗状況の把握」、③「ゴールから逆算した総合的・包括的な戦略」、④「組織の縦割りを越えた協力」、⑤「良いところ取り（＝易しくて目立つことで実績を上げたがる傾向が強く、本格的な政策目標が手つかず）の払拭」といった、難しい課題が山積しているが、そうしたことにチャレンジしていくのが、SDGsの大事なところである。

○ 国連大学サステナビリティ高等研究所所長 竹本和彦氏 「SDGs達成に向けた取組動向」

- ・SDGsの17の目標の達成には、全てのステークホルダー（社会を構成する人々、地域を構成する人々、世界

を構成する人々)の積極的な参加が必要とされており、そのことが反映された目標である。

- ・国際的な動向として、世界的に、アジア地域においても様々な国での取組が既に始まっている。日本はそのリーダーとしての積極的な取組が始まっている。政府だけでなく、ステークホルダーの積極的な参画をさらに広げていく様々な活動が展開されている。
- ・その一例として、持続可能な開発ソリューションネットワーク (SDSN) という広がりがある。日本でも2015年7月に、SDSN Japanが立ち上げられ、ステークホルダーがどのような活動を展開していくかについて相互に学んでいる。
- ・日本政府の取組は、内閣総理大臣を先頭とした全閣僚参加の推進本部での議論や円卓会議等の様々な取組・経験・意見を踏まえ、国としての実施指針を昨年の末に定めたが、SDGsの達成のためには、ステークホルダーの積極的な参画が不可欠であると、しっかりと記載されている。
- ・国連大学では主に政策指向型の研究を推進している。多くの研究プロジェクトがあるが、教育や都市の水問題のほか、SATOYAMA という日本初の取組についても様々な研究をしている。各課題は、全てSDGsとの繋がりや関連がある。研究活動を進めるにあたっては、実践者の皆さんとの対話から知恵と力をいただいて、研究に反映していけるよう対話方式のイベント (SDGダイアログ・シリーズ) も始めている。
- ・滋賀では琵琶湖を守る様々な取組が既に行われてきた。「石けん運動」がきっかけで、富栄養化防止条例や、湖沼法に繋がった。まさに県内で展開された市民運動が日本全体の環境政策に繋がった大きな実績がある。他にも、例えば「マザーレイク 21」「マザーレイクフォーラム」「滋賀水環境ビジネス推進フォーラム」がある。また、低・脱炭素社会を目指した活動においても様々な取組、とりわけ「滋賀創生プロジェクト」を推進される経済団体もあり、SDGsそのものをこのプロジェクトの中に反映している。SDGsは2015年9月に国連で決まったが、2015年に先んじて滋賀から発信をされた素晴らしい取組がある。
- ・私は、草津に本部がある I L E C (国際湖沼環境委員会) の理事も務めているが、2年に一度開催される「世界湖沼会議」の第一回会合が1984年に滋賀で開催された。これまで30年に亘る活動を続けている世界に誇る素晴らしい取組である。まさに湖沼流域管理の世界の中心が滋賀に置かれている。そしてその活動が、皆さんの活動、生活にも直結をしているということが注目に値する。
- ・既に滋賀においては様々な取組、様々な団体、そして県民の皆さん方御自身が積極的な活動を展開しておられる。今日は、SDGsという共通言語を通して、滋賀における活動を世界に発信する出発点になることを願っている。

○ 国連経済社会局 政策調整・関連機関間問題担当事務次長補 トーマス・ガス氏 基調講演

- ・私からは、SDGsの2030アジェンダが人間にどのような利益をもたらすか、お話をしたい。
- ・2015年9月に2030アジェンダが採択された。開発資金に関わる計画であるアディスアベバ行動目標やパリ協定の背景にある考え方も、SDGsと共通しているし、「仙台防災枠組2015-2030」に関しても、強靱な国を作ること、防災に取り組むことといった共通の精神・考え方が流れている。
- ・SDGsはただの計画、あるいは、現存する国際的な合意を強化するためだけに作られたものではない。これは共有すべき定量的なビジョンであり、合意を実施することが私たちの最大の課題である。
- ・SDGsは未来に向けて灯る光であり、GDPやお金でこの繁栄・豊かさを量ってはいけない。どうやって誰も取り残されない世界を作るかに関し、169のターゲットに対し、169通りの説明の方法がある。
- ・既に2年目に差し掛かっているが、貧困、貧富格差、不衛生、乳幼児や妊産婦の死亡率、女性の社会的な不平等、暴力や紛争などの課題は山積している。

- ・私たちは、非常に変化が早くて大きい世界に生きている。「人間に魚を与えるだけでは、1日しか生きていけないが、魚の捕り方を教えると一生食べていける魚を得られる」という諺があるが、今や、汚染や気候変動のために湖に魚がないという問題がある。
- ・バリューチェーンや金融システムなど、相互に依存しあっているこの世界では、外因がマイナスであっても、国境で止めることはできないし、一国で問題解決することもできない。
- ・2030 アジェンダは、普遍的で世界中で使えるが、一国、一会社、一人、一家族だけでは達成できない。これまでとの大きな違いは、「誰も取り残さない」ことがコミットメントされている。つまり、みんなが一緒に解決策を探し、互いに助け合いながら地球の命を守っていく中で私たちの命も守られていくということである。
- ・そのためには、あって当たり前と思いきんでいる水、空気、森、平和をうまく管理をしていくことに合意しており、一国のみ、友好国間のみではなく、みんなで共有し一緒に行動するということである。
- ・そして今後、アジェンダの達成度合いをデータで見ていくこと、及び様々なターゲット、ゴールを一つひとつではなく、縦割りだけでなく、横とも繋げて、全体として捉えて皆で協力していくことが必要である。
- ・政府の皆さんにとっては、国民のために質の高い公務を行うことが非常に重要である。国民の声に耳を傾けなければならない。特に、助けを必要としている方を取り残してはいけない。ビジネス界や、産学連携でもSDGsを推進していかなければならない。
- ・全ての経済活動が、SDGsを叶えるために行われているものか、確認して欲しい。みんなが豊かになるために、この富を持続可能な形で成長させ分かち合うことが非常に有効である。また、お金をどう使うかということではなくて、お金をどう稼ぐかということも重要である。
- ・そして多くの国々が直面している気候変動等の様々な環境問題は、一つの国だけでは取り組むことが既にできない。そのため、多国的な協力が必要不可欠である。その多国的なシステムによって、資金的にも、また政策的にも支援をしていくべきである。
- ・2030 アジェンダの中で基本となる大切なことが三つある。一つめは、自分自身、皆さんの会社、そして組織が、2030 アジェンダに取り組んでいるか。二つめは説明責任である。方針や政策の対話の中で、人々に対する説明がされているか。三つめは、置き去りの人はいないか。皆さんは最も弱い立場の人々がどこにいるのか、そしてなぜそうなっているのか知っているか。そしてそれを解決しようとしているか。
- ・今、世界が試されている。2030 アジェンダは、利害関係者や政府だけのものではない。一人ひとり、家族、地域社会、県のそれぞれが大きく貢献できる。皆さんの努力が、希望を生む。集団の力で希望を解き放つチャンスである。2030 アジェンダは、国民全体への約束であり、私たちの将来のためである。

○ パネルディスカッション「社会と経済」

モデレーター：国谷裕子氏

パネリスト：三日月大造氏(滋賀県知事)

大道良夫氏(滋賀銀行取締役会長、大津商工会議所会頭、滋賀県商工会議所連合会会長)

山本昌仁氏(たねやグループCEO、(株)まっせ代表取締役会長、滋賀県経済同友会副代表幹事)

松本紹圭氏(未来の住職塾塾長、世界経済フォーラム Young Global Leader)

□ 何故、SDGsを推進するのか、取り組むにあたっての期待と意味は何か

- ・琵琶湖の恵みに感謝すると同時に、将来もずっと豊かであって欲しい、もっと綺麗になって欲しい。
- ・琵琶湖の周りにはグローバル企業がたくさんあるし、世界各国から観光客が来られる。世界と繋がるこの琵琶

湖を世界との繋がりの中でより良くしたい。

- ・人口減少局面にある時代だからこそ、滋賀県が大事にしてきた、個人を大事にする、人と人との繋がりや人と自然との繋がりを大事にする、といった社会の有り様を作っていくべき。地方創生にも繋がる考え方である。
- ・滋賀県の企業・県民は環境への意識が高い。近江商人の「三方よし」の考え方に基づく、周囲のことに役に立ちたいという商人道や、琵琶湖が徐々に弱ってきたことに対して私たちの責任で何とかすべきとの思いがある。
- ・1990年代の後半くらいから、「環境」をキーワードに、事業の柱を磨いてきたが、気候変動対応だけでは未来は拓けない。次のターゲットとして、SDG sに取り組むべきと考えた。
- ・滋賀県は圧倒的に中小企業のウェイトが高く、大企業よりも対応が早くアイデアの勝負ができる。SDG sで新しいビジネスチャンスも出てくる。
- ・海外では滋賀県は知られていないが、誇れることがたくさんあり、もっと発信せねばならない。
- ・発信すべき私たちの取組を、1から17に当てはめると、会社の弱い部分が見えてきたり、SDG sとは普段やっていることであることが見えてきた。世界に私たちの情報を発信して、世界からアドバイスをもらいたい。
- ・SDG sが私たちの社会に投げかけている大事な考え方は、日本語の「縁」という考え方。つまり、人間だけではなく、あらゆる存在が繋がりお互いに相寄って成り立っていると捉えてきた精神的な伝統がある。
- ・昨今の、人と人との繋がりが薄まってきた風潮の中で、改めて、日本社会が大事にしてきたそうした考え方を、SDG sが今一度問いかけているのではないか。
- ・人間の存在、影響力が大きくなりすぎて、地球そのものに、良くも悪くも直結する状況が生まれており、SDG sのゴールを達成していかなければ、地球が保てない。

□ SDG sが自分たちにとってどのような武器・道具になるか

- ・新たな生き方・暮らし方のモデルを示せないか。例えば、「おかげさまで」という言葉は、「多くのものの恵みによって、今私たちは生かされている」という考え方に対する言葉である。
- ・一方で、私たちは、途上国の過重な労働や安い賃金の上に成り立つ商品を着たり、食べたりしているが、このことは持続可能かどうかを考えていくきっかけにしたい。
- ・滋賀県が古来やってきたように、社会的な目標をビジネスに取り込み、正当な対価を得ながら、会社経営をしていくことで、次の時代を作っていくリーダーになれないか。
- ・滋賀県にお越しいただくためには、世界から見た時にナンバーワンでないといけないと思うので、私たちのブランドを作る意味では、SDG sを思いきり利用したい。
- ・世界からお越しいただくにあたっては、「守っていただけるのであれが、どうぞお越しく下さい」というくらいのきちんとした地域のルールがある方が、観光としては素晴らしい街になっていく。
- ・代々、どの街でも長年守ってきた「ルール」や「しきたり」を、外部から言われて変えるようでは、特徴がなくなるので、昔ながらのやり方をお越しいただく方に伝えられるような仕組みを持てば良い。
- ・しっかりSDG sに取り組めば、企業価値や企業ブランドが上がる。長い目で見たら、安い物を作って目先の売り上げを伸ばそうという企業より、SDG sにしっかり取り組んでいる企業が絶対に有利になる。
- ・経済界等がメディア等を使って、それをPRや宣伝をして応援していく必要がある。
- ・これから本格的に経済界と行政が、例えば、バリアフリー化のためにはコストアップにつながったり、海や森をきれいに保つための規制が厳しすぎたり、という軋轢の中で道を作っていく必要がある。
- ・企業や投資家がSDG sを意識し始めると、その企業と取引のある中小企業も含め、SDG sの一貫性があるのかが問われるようになり、そうしたことも、意識せざるを得ない。特に海外の方が厳しい。

□ SDG sに向き合う時に、何から取り組めば良いのか

- ・「エシカル」の考え方は、SDG sと重複している部分もある。
- ・手近なところで、できるからやっ払いこうという考えで取り組むのが一番良い。
- ・「四方よし」という考え方があり、四方目は、「仏法よし」と言われ、四方目は、三方（売り手、買い手、世間）と水平に広がるのではなく、世界を全く異なる視点から見ていることと言って良い。
- ・世界を俯瞰するような視点は日本の企業文化にも現れているが、世界と大きく異なることは老舗が多いことである。恐らく継続性を大事にする文化があったのではない。
- ・日本は御先祖様もステークホルダーに入れて考える精神文化があり、御先祖様や、未来の子孫たちにきちんと繋いでいく世界を作っ払いこうという、長い時間軸でものを考えることが、非常に重要である。

□ SDG sの推進に向けて、社員の意識向上、経済界や企業等への浸透にどのように取り組めば良いか

- ・一人の県民の立場で、徹底的にSDG sの物差しで、自分たちの暮らし、自分たちの仕事を見つめ直すことが大事である。そして、2030年を展望して夢を描き、すべきことを、バックキャストで作っ払いこうことである。
- ・そのためにはオープンでないといけない。あらゆる人がステークホルダーであり、時には世界から様々な意見をいただきながら、自分たちの仕事を考えたい。
- ・ボランティアでは長続きしないので、やはり本業を通して、いかに自社の事業の中にSDG sの目標に向けての活動を取り入れていくか、ということであろう。
- ・17のターゲットに対する取組のバランスを見れば、その家庭の状況が見えてくる。その延長線上にある商売も同じことと思うので、普段の生活の中にどのように落とし込めるかが大事である。
- ・自分たちだけが良ければ良いということではなく、地域を私たちの家と思い、様々な社会活動には積極的に参加することが、私たちの考えであり、唯一の社員教育である。
- ・自己への気付きを持つことが、何をするにもスタート地点になる。自己を見つめることももちろん、世界に目を向けて、今どのような世界に自分が立っているのかを知ることが大事である。

□ ガス氏のコメント

- ・SDG sは、私たちが達成するものだが、そのプロセスも大事である。
- ・私は、皆さんからのSDG sは会社や県のブランドの一つであるというお話に非常に刺激を受けたが、一つお話ししたいことがある。
- ・私は、国連は民間と距離をとらなければならないのかと聞かれる。なぜならば、みんなこのバッジが欲しいから、ビジネスに役に立つからである。SDG sということで、持続可能なので、これをつけたいと言う人がいるが、SDG sはメダルや賞状ではない。今、私たちが取り組んでいることである。
- ・マハトマ・ガンジーが、「私たちは、その変わった世界を見たい。だから努力をするんだ」と言ったように、皆さんは会社として、県として、ステップアップされている。私たちが達成したものが、その結果として、消費者や観光客に魅力的なものになっている。
- ・そして、みんなが参加することが、SDG sの素晴らしい面であると思うが、うまくいくことばかりではない。しかし、人を巻き込むということは、問題ではなく、解決になることである。

□ 「SDG sとは何か」と聞かれたら、どのように答えるか

- ・「SDG sは私たちの夢」である。若い人とも対話をしながら、私たちの夢を一緒に実現しようという、メッセージを發したい。

- ・「これからの生き方、生きる方向のようなもの」である。
- ・「未来のために」である。17 の目標を達成するというより、17 の目標を超えていくことをやっていきたい。日本がそういう素晴らしい環境にあることに感謝している。
- ・「SDG s が、自己、自分中心を乗り越えていききっかけになる」である。自分中心とは、自己責任という言葉もあり、今はそういうことが強調されたり、分断されたりする世界にいるようだが、自分中心から地球中心へ、エゴからエコへというシフトを促してくれる、一つの大きなきっかけになる目標と言いたい。

○ パネルディスカッション「人と暮らし」

モデレーター：末吉竹二郎氏(国連環境計画・金融イニシアティブ特別顧問)

パネリスト：越直美氏(大津市長)

塩田浩平氏(滋賀医科大学学長)

北川陽子氏(ファブリカ村村長)

武村幸奈氏(株)はたけのみかた代表取締役)

□ それぞれの立場でのSDG s

- ・「SDG s」「国連」というと、遠い感じがするが、市民にとって日常生活と切り離せないものである。市民一人ひとりが「我がこと」として捉えるには、自分なりのSDG sの動機が必要ではないか。自分自身は、「5 ジェンダーイコリティ」である。日本では女性の仕事と子育ての両立は大変で、どちらかを選ばないといけない状況にあることが分かったことが動機になっている。
- ・最近、内向きと言われる日本の若者が、SDG sを通じて地球規模の問題に関心を持つことは素晴らしい。現代は情報社会であり、知識を教える時代ではなくなった。物事の本質や真実を把握し、批判力を持って、新しい時代を切り拓く行動力・知識が必要であり、17 のゴールと 169 のターゲットは良い教材になる。
- ・世界の新しい動きの中で、日本は「何をやれば良いか (what do)」を考えるが、SDG sが何故必要なのか、MDG sでは何故不十分だったのか (why) を考えないと、結局すぐできることだけ終わってしまい、人が変わり時が経つと、本質を忘れてしまう。
- ・単に物を買うだけではなく、地域のことや暮らし方も考えながら、物を選ぶこと (エシカル消費) が必要と考え、地域の産業の紹介や作り手と使い手を繋ぐための活動をしている。「三方よし」の中でも、作り手は歴史も含めた素材で、環境も含めた作り方をしないといけないし、買い手も、安い、かわいいという今だけの買い方ではなく、「ここで」「この人が」作ったものという視点になって欲しい。ワークショップの開催や、製作体験などを通じて、人、子どもたちの心を育てることから始めないといけないと気付いた。
- ・滋賀県産の無化学合成農薬・無化学肥料で作られた有機野菜を使って、働くお母さんと、自然環境の農業に取り組む農家の両方の支援になるようなベビーフードを作っている。単にベビーフードが売れるだけではなく、より良い循環とか、継続的な流れが生まれるビジネスである。

□ 身近な取組の事例として、食品等の「ロス」を、どのように無くすことができるか

- ・食品は作る時、処分する時の大きなロスが環境に負担を掛けており、食品ロスを減らすための具体的な第一歩として、「3010 運動」(宴会の最初の 30 分と最後の 10 分は席に着いてしっかり食べる取組)に取り組んでいる。その他、「ドギーバック運動」(レストランで残った食事を「犬に持って帰り」と言って持ち帰り、家で人間が食べるという、アメリカ等で行われている取組)にも取り組みたい。

- ・廃棄繊維も大量にあり、いかに無駄な物、いらぬ物を一時の思いで買っているか。ビジネスの立場では、買ってもらうため、少しでもコストを抑えるために、たくさんの量を作る。物がなく、一部の人にしか着用できなかった物が、工業化によって、みんなが着られるようになったことは良かったが、どこかでこのように行き過ぎた。価格だけでない物の価値を伝えることと、売上げの狭間で、非常に揺れている。
- ・消費者の意識を「変えよう」とするのは難しい。商品自体の魅力や価値を感じて手に取った方が、この美味しい野菜はどうやって作られた物か、誰が作った物かに興味を持つという順番であり、自分たちが、消費者のために良い商品を作れているのか、社会のためになる商品を作れているのかが大事である。
- ・ある企業の創業者が、「今の経済は、原材料開発、商品制作、消費、廃棄まで一直線であり、両側が全く繋がっていない。自然界は何かが終わると必ず次の受け皿に引き継がれるサークル（円）となっており、全てが次の準備にもなっている。人間の世界でこの両側を結びつけることが、これからのビジネスの役割だ。」と語っていた。消費者も含め、社会全体でこのようなビジネスが成り立つ、新しい経済を作っていくかといけぬ。

□ 県民、消費者との関係

- ・「理解してくれない消費者が悪い」という、ある企業の技術者の言葉に対し、「それは話が逆で、ビジネスが今の消費者を作ったのだから、今の消費者を変えようとするならば、ビジネスが変えていく責任も大きい」と言ったことがある。消費者は、自らの価値観で行動すると同時に、選択がなければ、やむなく今ある物の選択をせざるを得ない。そういう意味では、商品やサービスを提供する側の責任も非常に大きい。
- ・作る側の責任は大きい。売りたい、数字を上げたい、儲けたいがために、安くて適当な物を作ってしまった責任もあることに気付いてきている。
- ・市民が選ぶ際に、作り手の顔が見えたりすると無駄にならない。今は、インターネットがあるから、どのような人がどのように作るかが分かり、事業者も日本全国や世界中に広がっていくチャンスがある。
- ・今までの学問は全くの縦割りであったが、これからは様々な領域を乗り越えて、行動できる、考えられる人間が必要になる。そういう意味では、SDGsは幼稚園から大学、あるいは生涯教育、全ての機会でも話題にして、教材になるのではないか。官製の道徳教育の教科書を作るよりは、数段良い道徳教育になるのではないか。

□ 自らの今後の展望

- ・SDGsは相互に関連していることが大きなポイントなので、自分のテーマとして、一つのことをやることによって、他の17の目標に広がり、他の皆さんと関わり、大きく広げていきたい。
- ・日本の社会は大きな変革の時期に来ているが、自分たち年寄り世代が出しゃばりすぎて若い人の活躍の場がなくなることがあってはならない。若い人が行動できる人間になってもらうように、側面からサポートしたい。
- ・工業というインダストリーから、これからは、マインドインダストリー（心の産業）が大事だ。そのため、生産の現場にいながら、物ではなく、「居場所」を作っている。古い織物工場を改装して、様々な地域の作家の物とか産業を紹介しながら、人と物の関係とか、人と人の関係性などを作りたい。
- ・ベビーフードによって、お母さん自身の意識が変われば、今度はお母さんに育てられた子どもが大きくなった時に、自分が育ってきた生活を、自分の子どもに受け継いでいくようになる。今のお母さんだけではなく、また次の世代、次の世代に繋がっていくような商品作りをしたい。

□ ガス氏のコメント

- ・子どもたちがどのように成長していくか、そして、それぞれの市民が参加していくということが大事である。皆さんはスタートしたばかりで、まだ困難がある。

- ・生産・消費を持続可能な方法で行っていくために、高いゴミ袋製作費用がかかっており、これが動機付けになる。ゴミの排出にお金がかかるので、ゴミを小さくする機械を作るようになる。ゴミを小さくすれば払うお金が減る。また、非常に重いゴミには重さで課金すれば良い。大事なものは、動機付けをどうするかである。
- ・ドギーバックは犬のためであると言われるが、そうではない。ドギーバックによって、ゴミを減らすことができるので、私はいつも、ドギーバックを頼んでいる。
- ・教育が大切という意見にも感銘を受けた。小さな頃から、そして大きくなっても、みんな教育が必要である。SDG s はみんなの知識を、一つずつ変えていくわけではなく、全部を統合していくように働く。将来のために、みんなが関係しなければならない。
- ・非常に強いブランドを持っていたら、付加価値をそこに詰め込むことができるという話を聞いた。文化的な価値、社会的な価値が詰め込まれている。そして健康の価値、環境の価値も、商品が環境に優しい方法で生産されているから、窒素は少なく化学肥料も少ないということである。全ての価値観・付加価値、全てのメッセージがブランドに組み込まれており、素晴らしいことである。
- ・そして、その消費を、直線からサークル(円)に変えていくという、その考え方も素晴らしい。

□ 最後に

- ・2015 年はパリ協定とSDG s が生まれたため、第二次世界大戦後、最も重要な年との言い方がある。パリ協定とSDG s は、21 世紀の地球社会を引っ張っていく。あらゆる分野において、これに沿う生き方は許されるが、これに反することはできない。
- ・CSRの分野で、「Social license to operate.」という言葉がある。ビジネスにはライセンスが必要で、例えば県や市、あるいは監督官庁がライセンスを出す。でもそのライセンスは、彼らが元々持っていた権限ではなく、ライセンスを出すところに、社会が権限を委ねたのである。ライセンスをもらって操業をする人たちは、社会がライセンスをくれた、そういう認識が極めて重要である、という概念がある。
- ・そうすると、SDG s の標語である「Transforming our world」は、私たちの世界を変えていく、2030 年は成り行きの未来ではなく、自分たちが望む未来に変えていくという目標を持って能動的にアプローチすることが、SDG s である。
- ・是非、みなさんが、「Transforming our Shiga」——これで、日本のみならず、アジア、世界に対して、最も優れたモデルを作っていただきたい。

○ 宣言 「未来への約束」

未来との約束。滋賀で生きていく私たちは、自らが望む未来に向かって、約束します。

全ての人々が、幸せに生きていく滋賀を作ります。

そのために、全ての人々が、サステナブルな滋賀を目指します。

滋賀で暮らす私たちは、世界が望む未来に向かって約束します。

世界の人たちが、幸せに暮らせる世界を作ります。

そのために、世界の人たちと、ともにサステナブルな地球を目指します。